

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「なぜ、子どもは変容できたのか」

昨年度まで、気持ちが不安定で授業中に離席が多かったMさん。今年度小学3年生となり、授業に参加するようになりました。学級担任にこっそり秘訣を聞きました。

1 学級のルールを明確にする

- ・学級のルール（聞く、話すときの姿勢等）をみんなで決めて、みんなで確認し合う。

Mさんをルールで縛るのではなく、適切な方法や行動を具体的に教える。ルールは気持ちをコントロールすることを学ぶ道具であるが、ルールで縛ったり、強く言い聞かせたりすると関係が悪化することもある。子どもはルールよりもラポールに従う。日ごろから子どもに話し掛けたり、子どもの話を聞いたりする「言葉のキャッチボール」が大切となる。

2 セーフとアウトラインを示す

- ・感覚に対する「偏り」があるMさんの特性に合わせた合理的配慮をする。

Mさんは足裏の感覚に過敏さがあり、足先が圧迫されるズックを履くことが苦手である。そこで、教室内ではズックを脱ぐことを許可するが、教室から出るときはズックを履くことを本人と話し合って決めた。感覚過敏は努力で克服できるものではない。無理をさせず、苦痛を少しでも和らげる環境を整える。特別なルールを周囲の友達に説明し、理解が得られると、特別な支援が当たり前の支援となる。

3 授業で子どもの自己肯定感を高める

- ・授業でMさんの強みを生かした場面やみんなから認められる場面を設定する。

Mさんは授業中、姿勢を崩すことが多いので注意したくなる。しかし、友達の発表後に感想を述べたり、誰も気付かない意見を発表したりしている。問題行動に注目して注意するよりも、「友達の話を聞いて感想が言えたね」など、できている行動を言葉で具体的にほめる。望ましい行動に注目するとほめる回数を増やすことにつながる。

「トラブルはその日のうちに対応策を考えて明日に生かしている」、「子どもへの指示は短く、シンプルに伝えている」という有効な手立ても教えてくれました。

小学3年生は自分のことを客観的に見つめることができる力（メタ認知）が伸びる時期です。Mさんは自分の言動について、それでよいのか、あるいは、改善すべきなのか、自己点検をして修正する力が付いてきたことも変容の要因になっています。

**とれたて直送便**

【運んでいるのは誠意（こころ）です】

ある運送会社のトラックの後方を走っていたとき、リヤドアに、「運んでいるのは誠意（こころ）です」という文字が目にとまりました。荷物（モノ）ではなく、気持ちを届けているというキャッチコピーに、私たちが子どもに届けているのは、知識だけでなく、「何」を届けているのだろうかと考えました。

さて、皆さんは（ ）にどんな言葉を入れますか。
「子どもに届けているのは（ ）」です。